

「コロナ禍とインド」 三尾稔（国立民族学博物館教授）

(1) 外出規制の影響 2020年7月4日刊行

コロナ禍の終わりはみえない。日本では5月25日に緊急事態宣言が解除されたが、再流行のおそれが指摘されている（本稿執筆は6月4日）。私が長年調査に訪れているインドでは流行拡大が続き、執筆時の感染者数は22万人弱で世界第7位となっている。今月の連載ではコロナ禍がインドの暮らしや文化（特に宗教文化）に及ぼす影響について考える。

同国初の感染確認は1月末で、中国・武漢から一時帰国した留学生が感染者だった。私はそれを東部の大都市コルカタのホテルで聞いた。入国審査官のマスク着用など防疫体制も整いつつあったが、この一報はまだ遠い出来事として捉えられていたと思う。

私はヒンドゥー教のドゥルガー女神像収集のため同地を訪れていた。みんなの資料は古くなり、時代の変化を映す資料収集の必要がある。同地は女神祭礼の中心地の一つで、見事な職人芸による像で知られる。つてを頼り良い職人を探し、展示用資料制作を依頼して2月に帰国した。

しかし、インドでは3月に感染が急拡大し、同25日からロックダウン措置が取られた。外出は全面禁止となり、鉄道やバス、飛行機等の交通も遮断。職人も外出できず、像の制作も止まったままだ。そもそも多人数の集まる祭礼の挙行したい見通しが立っていない。コロナ禍は伝統的宗教文化にも重大な衝撃を与えているのである。



変化し続ける女神像。祭礼中止はその活力をも止める
＝コルカタ市女神像展示館で2月、筆者撮影

(2) 伝染病の記憶 2020年7月11日刊行

春の大祭ホーリーの7日後、北部インドの街や村ではシーターラー女神への礼拝が行われる。女性たちは早朝冷水で沐浴し、女神の祠を参拝する。この日は調理用の火の使用は禁忌で、家族は前日作り置いた冷たい食物を食べる。米を乳に浸したキールという料理が供されることも多い。これも体を冷やす効果がある。

その名が「冷やすもの」を意味するこの女神、実は世界中で猛威をふるった天然痘の現れとされる。種痘により1970年代に絶滅したが、この病は高熱と体じゅうにできる丘疹が特徴で伝染力が非常に強く、絶命する者も多かった。延命しても丘疹の跡は癍痕（はんこん）として一生残った。

女神の神体は癍痕を思わせるデコボコの岩である。人びとは熱病の女神を「冷たい」と名づけ、例年流行が拡大する酷暑期の前に体を冷やす儀礼を行ってきたのだ。暴れば恐ろしい女神の力を宥め、それにすがって幸福を願う点にヒンドゥー教の特徴が現れている。病が絶滅した今も儀礼は世代を越えて継承され、婚礼の前にも新郎新婦や家族の無病息災を祈るため必ず礼拝がなされる。

天然痘女神信仰には、居丈高に病の制圧をめざすのではなく、人の無力を謙虚に認め、病苦を記憶し病と共存しようとする姿勢が読み取れる。現代文明に衝撃を与えたコロナ禍はいかに記憶されてゆくのだろうか。



婚儀前の天然痘女神への拝礼。中央の岩がご神体＝インド・ウダイプル市で2012年3月、筆者撮影

(3) 地方都市の現状 2020年7月18日刊行

インドは新型コロナウイルス感染者が1000人未満だった3月下旬に、外出禁止や交通遮断を伴う厳しいロックダウン措置を開始した。しかし感染拡大は止まらず、何度か内容変更を繰り返しつつロックダウンは5月末まで継続した。現在は経済への打撃を考慮して措置は緩和され、州単位で感染対策が取られているが、感染者数は増加を続け、本稿執筆の6月18日時点で累計感染者数は35万人を超えている。

劣悪で密な住環境の多い大都市で感染が止まらない。また急なロックダウンで仕事を失った出稼ぎ労働者が出身地に帰ることで感染が全国に拡散していることも感染急拡大の要因と指摘されている。

筆者が長年調査している西部の地方都市ウダイプルの友人によると、ロックダウン中は辻々に警官が立ち、必需品の購入以外は全く外出できなかったという。商都ムンバイから戻った出稼ぎ労働者からの感染例もあるようだ。商店やレストランは再開したが活気は戻っていない。今も50人以上の集会は禁止。婚礼や祭礼も全く行えない。旧王宮や美しい湖が魅力の観光地なのだが、客は途絶えホテルや土産物店も危機にある。

インドの経済発展は大都市の躍進を多数の中小地方都市が支える好循環を生んでいた。コロナ禍はそれを一瞬で凍結させてしまった。回復への道程は長いものになるだろう。



華麗な女神像の行進は観光の目玉だったガンゴール祭は今年、中止された＝インド・ウダイプル市で2019年3月、筆者撮影

(4) 岐路に立つ宗教文化 2020年7月25日刊行

筆者の調査地であるインドのラージャスターン州はロックダウン解除後も全ての宗教施設を6月末まで閉鎖した。他州では有名寺院や施設が再開した例もあるが、境内に入れる信者数を限ったり、聖なる物や空間への接近を制限したりしている。集団礼拝が実際にクラスター感染につながった例もあり、慎重に対応せざるを得ないのだ。

インド庶民の信仰の特色は、抽象的な神を個人が内面で信仰することよりも、具体的な聖なる存在に実際に触れ、その力に与（あずか）るのを重視する点にある。人びとはかけがえのない聖なる存在との交流のため日々寺院などを参拝する。聖なる力が強まる祭礼では数万の群集がともに神的存在を実感する。これは多数派のヒन्दゥー教だけでなく、イスラームの聖者信仰などにも共通する特色だ。

コロナ禍は神と人の交流の核心を直撃した。感染防止のため集団での儀礼も、聖なる像や遺物に不特定多数が触れることも許されない。病に苦しむ者に開かれるべき寺院などを災厄のさなかに閉じるという矛盾に誰もが当惑する状況が続いている。

これだけ長く全土で宗教施設が閉鎖され、信仰に関わる行動の変容を求められ続ける経験はかつてない。神との交流もバーチャルなものに変わってゆくのか。それとも古い絆が力強く復活するのか。コロナ禍は宗教文化をも岐路に立たせている。



拝礼用聖水の散布。力を宿す水を通じた神との交流だ＝インド・ウダイプル市ジャグデーシュ寺院で2004年8月、筆者撮影